

「逸脱の始まり」

先週の 14 日、月曜日。敦賀教会幼稚園では、第 106 回目の卒園式を執り行いました。今年は、ちょっと人数が少ない 11 名の卒園生でしたが、とても感受性の豊かな子ども達で、式中に涙を堪え切れない様子も見受けられました。子ども達の涙に誘発されて、教職員も涙を堪え切れず、なんだか今年の卒園式は印象深いものがありました。「卒園に伴う別れの悲しみを理解できる」そんな想像力と感受性を備えた、立派な卒園生たちであったと思います。

式終了後、保護者向けに園長の挨拶という時間が設けられています。毎年、そこで私は同じことを伝えています。要約すると、こんな感じです。「幼稚園では、子ども達の【ありのまま】を受け止めて愛を注いできました。それは、子ども達にしっかりと自己肯定感を持って欲しかったからです。これから学校生活が始まるに伴い、社会的な規範をより一層身に着ける中で、子ども達は戸惑うこともあるかも知れません。しかし、【ありのまま】を愛され、自己肯定感を持った子ども達は、いずれ自分で考え、自ら行動し、選ぶべき未来を勝ち取っていけるでしょう。そのための幼児教育を行って参りました」という具体です。

言い方を変えると、幼稚園では、「型にはめる教育」ではなく、「自分らしく生きる教育」を志しているということですね。「自分らしく」と言うと、随分と軽い印象になってしまいましたが、「人から言われて、こうする」ではなくて「自分で考えて、こうしたい」と自律して行動できるようにする教育です。まあ、なので、実のところ、敦賀教会幼稚園の子ども達は、小学校に行って馴染むまでになかなか時間が掛かると言われています。そこは、保護者の方にも正直に伝えているところです。

私は、学校教育を全て否定したいわけではありません。学校は、社会のルールや仕組みを経験しながら身に着けて行く大事な場所であると思います。ただ、一方で、現在の教育の枠組みや共通認識に適応することが難しい者に対しては、今の学校は時々非常に不寛容な態度を取る場合があります。「こうすべき」「こうあるべき」「自分らしさよりも、学生らしさ」「わが校に相応しい振る舞いとは何か」という一定の枠組みを強いることがあります。それは「ちゃんとした大人に育てるため」という正当な大義名分のもとで、そうしているのだと思いますが、そもそも「ちゃんとした大人」とは、一体どんな大人なのかという結論は、それほど明確ではありません。誰が決めたかの定かではない、その規範の中で、同調圧力とか、「空気を読む」とか、「波風を立てない」とか色々な言い方をされますが、私たちの社会は、そこから自由になろうとする者に対して、何故か穏やかなではいられない。そして、足を引っ張り合う、出る杭は打たれる、なんていう不幸な現実も散見されます。

それは、我らの主イエス・キリストに対しても、同じでした。今回の聖書箇所最初の言葉は、「このときから」と書かれていますが、これは、神様の御計画とイエス様のお働きが、新しい段階に入ったことを意味しています。「このときから」イエス様は、次なる新しいことをなされる。それは何か。十字架なんていう非常に非常識な救いの御業です。「このときから、イエスは御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活するところになっている、と弟子たちに打ち明け始められた」。イエス様は「苦しみを受けて殺される」という十字架上での死を越えて、復活するという奇跡を成し遂げられると言われました。イエス様は、御自分から死ぬことを目指して歩まれ、これを越えることを決意し、約束されたのです。

しかし、これを聴いたペトロは言います。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあっては

なりません」。ペトロは、この時、まったく理解が及んではいませんでした。イエス様が死を越えて復活されることも理解できていませんでしたし、「救世主が殺される」という極めて非常識な事実を受け止めることができませんでした。ペトロには、自分の持つ確固たる救世主のイメージがあったのです。「救世主たるもの、キリストたるもの、こうあるべきだ」という考えです。もっとも、この考えは、ペトロ固有のものと言うよりも、当時の社会一般の共通認識であったかと言えます。「救世主は、こうやって、こうして、こんなすごいことをして、私たちを救ってくれるに違いない」という、自分たちの思いや願いばかりを散りばめた都合の良い救世主のイメージを、みな持っていました。神様の御子に対して、人が「こうあるべき」という注文をつけること。これがいかに不遜で、傲慢なことか。ペトロも、また当時の多くの人々も気付きませんでした。そして、私たちも、よくよくこの不遜で、傲慢なことを考えてしまいます。神様の御計画があると知りながら、イエス様の御心があると知りながら、「なぜ、こうしない」「どうして、こうならない」「神様がいるなら、世界はこうあるべきだろう」と考えてしまいます。「サタン、引き下がれ、あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」という、イエス様の辛辣な指摘は、ペトロだけでなく、私たちをも貫く重たく鋭い御言葉です。

しかし、そうは言いながら、私は不思議と、このペトロがイエス様をわきに連れて行って、いさめるという場面が、とてもリアルに想像できます。ペトロは、おそらく、世の中をよりよく弁えている者として、社会と言うものをよく理解している者として、イエス様を注意し、諭そうとしたのだと思います。神様の御子という、聖なる方であるがゆえに純粋で無垢で、つまり世間知らずな方に対して、社会が求める救世主とは何か、人々が願うことは何か、人々を導くためにはどうすればいいのか、ということを教えてやろう、と思ったのではないのでしょうか。ペトロは、イエス様をこの社会の色に染めようとしたのです。人の想像を大きく超えて救いの御業を示そうとするイエス様

に対して、ここに留まった方がいい、そんな変人扱いされることは言わない方がいいし、やらない方がいい、みんなにとって都合の良い、当たり障りのない主イエス・キリストであった方がいい、と言ったのです。

今日の聖書箇所において、イエス様がペトロの助言の通りに、人のことを思って、その判断を覆されたなら、今日まで続く、多くの救いと幸せは存在しなかったでしょう。と言うか、絶対にキリスト教は誕生しませんでした。イエス様が十字架を経験することなく、社会の色に染まり、人の作った枠組みの中で安住されたなら、ここに教会は建たなかったでしょう。イエス様が、周りに何と言われようと、群衆に罵倒され、救うべき人から石を投げられようと、それでも尚、諦めずに、あらゆる制約やお約束や同調圧力を打ち破って、十字架に掛かり、復活されたから、私たちは今週も元気に、希望を見上げて歩むことができます。

私たちの希望とは、その実、私たちの手元にあるものではありません。人の思いに支配され、閉じ込められた場所に私たちの希望はありません。何を望むにして、何を願うにしても、それは人の想いを大きく超えた、天にある希望によって支えられています。私たちの手元にではなく、天に希望が蓄えられているから、私たちは、望むべくもないことでも望んで、願っても仕方ないと思えることでも、神様への祈りの内に願うことができるのです。イエス様が、人の思いではなく、神様の御心に従って歩まれたから、私たちは人の思いによって潰されそうな時でも、この世の不条理によって追い詰められている時でも、尽きることのない希望を見出すことができます。十字架を越えて進まれたイエス様に寄り頼みつつ、今週も元気に、足取り軽やかに歩んでいきましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちの為に尊い聖日を備えてくださり、感謝致します。この聖日、私たちは、あなたの深い御旨に基づいた御計画と、主イエスの我が身を顧みない贖いの十字架とを憶えて、賛美

の祈りを捧げます。人の思いではなく、主の御心によって導かれてきたこの世界に、今再び、あなたの大きな救いと栄光とが豊かに示されますように。また、私たちが来る新しい1週間も、真すぐに、躓くことなく歩んでいけるように、どうか私たちの信仰を強めてください。迷うことや、戸惑うことの多い毎日です。しっかりと御心を尋ね求めつつ、キリストの平和の使者として歩いていくことができますように。導いていてください。

この祈りを、尊き主の御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。